

消費者に心を届けるバラづくりを実践 ～地域の農業の発展にも尽力～

西尾市 大須賀慶一氏
施設花き（バラ）

【平成28年2月22日掲載】

40年以上にわたり「消費者に心を届けるバラづくり」を実践するとともに、共選組合や法人の設立の中心的な役割を果たし、現在も西尾市農業経営士会の会長を務めるなど地域の農業の発展に尽力している、西尾市の大須賀慶一さんをご紹介します。

中学生時代に就農を決意

大須賀慶一さんを就農に導いたのは、中学生時代に読んだ一冊の雑誌でした。西尾市のサラリーマンの家庭で育った大須賀さんでしたが、中学2年生の時に読んだ雑誌に掲載されていた浅岡バラ園（西尾市）の記事に大きな感銘を受けます。「サラリーマンのように他人と競争するのではなく、みんなに喜んでもらえる職業に就きたい。」と就農を決意した瞬間でした。

その決意どおり高校は園芸科に進学。卒業後には念願がかなって浅岡バラ園で2年間の研修に入ります。研修で得た多くの経験、それは栽培技術だけでなく、バラづくりへの熱意と誇り、地域や人とのつながりなど、その後の大須賀さんの原点となりました。



大須賀慶一さん

消費者に心を届けるバラづくり

浅岡バラ園での研修を終えた大須賀さんは、昭和45年に20歳で就農し、バラ生産に励みます。最初は7aのビニルハウスから始まりましたが、徐々に規模を拡大するとともに、施設もガラス温室に更新。平成3年には40aにまで規模拡大を実現しました。

この間には、夜中に自家用車を飛ばして、東京の市場まで新品種を売り込みに行くこともしばしば。「市場担当者に実物を直接届けることで、生産者の想いを伝えることができ、市場の信頼を得ることができる。」との信念からで、この取組は平成初期まで続きました。

そして、大須賀さんが常に心がけてきたことは、浅岡バラ園で学んだ「消費者に心を届けるバラづくり」。「バラは人生の節目で使われることが多い。プロポーズに向かう人、孫の発表会を見に行く人など、みんなそれぞれの想いを伝えるためにバラを買っていく。どんな些細なことでも、想いを伝えたい気持ちは一緒。みんなに喜んでもらえるバラを消費者に届けたい。」と大須賀さん。まさに、バラづくりへの熱意と誇りにあふれていました。



バラ栽培ほ場

共選組合、法人の設立・運営に尽力

大須賀さんは、一方で、持ち前のリーダーシップを発揮して、西尾地域のバラ産地の発展にも尽力します。

平成4年には、主力品種のロットを確保し有利販売を目指すため、地域のバラ農家をまとめてレインボーバラ共選組合を設立し、初代組合長として4年間、組合の運営を任されました。共選組合には、浅岡バラ園の研修生OBを中心に18名が集まりました。「浅岡バラ園での研修で得た人とのつながりのおかげ。共選であっても、それぞれの個性(色)を生かすことが大切との思いからレインボーと名付けた。」と話していただきました。

また、平成15年には、先端技術の導入と雇用の活用による国際競争力のある産地を築くため、9名の経営者で農事組合法人レインボーを設立し、1.6haの大規模経営によるバラの周年出荷を実現します。大須賀さんは、ここでも初代の代表として9年間という長きにわたり法人運営に携わられました。

組織のまとめ役として、大須賀さんが心がけたのは「不平等の公平」でした。「個々にみれば経営面積も違えば、考え方も違う。持って生まれたものが全く平等ということはない。こうした不平等な人々の集まりの中であっても、みんなが公平と思えるように組織を運営することが重要。」と、自らの信念をお話しいただきました。

豊かな地域づくりを目指して

今では、ご自身の経営を後継者である息子さんにバトンタッチするとともに、法人の代表も後進に道を譲った大須賀さん。「仕事と趣味が逆転したような感じ。楽しんでバラづくりができており、第一線を退いて見えてきたこともある。自分が築いてきた経営や法人を、時代に合わせて、変えていくところは変え、残すべきところは残していけるよう、様々な角度からサポートしていきたい。」と話していただきました。

現在、大須賀さんは、西尾市農業経営士会の会長として、地域の先導的な農業者の方々を引っ張るとともに、ロータリークラブの副会長を務められるなど、地域のリーダーとして忙しい毎日を送ってみえます。最後に今後の展望をお伺いしたところ、「日本の産地とは、生産量や販売額だけではなく、どれだけ消費者に心が届いているか、どれだけ地域や人とのつながりが充実しているかで決めるべきもの。一人一人が豊かな農業者になり、それが集まって豊かな地域を作っていくことが必要であり、そうすれば自然と後継者も確保されていく。これからも、より一層、豊かな地域づくりに役立てるよう尽力していきたい。」と力強く語っていただきました。

大須賀さんの熱い想いは、自身の経営から始まり、共選組合・法人の設立を経て、豊かな地域づくりへと、大きく広がりを見せながら、消費者に届いていきます。



新品種「ピスカップ」

執筆：農業経営課
取材協力：西三河農林水産事務所農業改良普及課